

アトリエ 琉游舎 だより 129号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2022年4月20日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>



- 高浜虚子の句です。ひとひらの花びらも散ることのない満開の時。現実にはこんな瞬間が存在するのかわかりませんが、この後には視界を遮るほどの花吹雪が見られるはずですよ。
- 例年ならソメイヨシノが最初に咲き、散る頃に山桜が次々と咲き始め、4月の下旬には遅咲きの山桜に紫の藤の花が絡みついた景色が鏡となって蓮池に映し出されます。ところが今年はこの二つがほぼ同時に満開となり、様々な桜の姿を楽しむ期間が短くなりました。
- さくらと同様にモクレンも”咲き満ちてこぼるる花弁もなかりけり“でしたが、桜吹雪が道路をピンクの絨毯で埋めたその日の朝、全ての乳白色の花弁が一夜のうちに落下し根元に半径2mほどの丸く白いカーペットを出現させていました。桜もモクレンも花びらがこぼるる時は偶然とは言え同じ日でした。それでも桜はまだ数日かけて名残惜しげに花びらを散らし続けていましたが、モクレンは一夜にして全ての花弁が落下し葉っぱをまだ付けていない木は丸裸の状態となって残っています。あたかも花の咲く前の状態に戻ったかのようでした。
- 私は虚子がこの句を作った時の情景を知ることができません。自然描写の句で、花＝桜のことであれば私の興味を引くこともここに取り上げることもありませんでした。日本人的情感の予定調和的な句だからです。ところが夜のうちに壮絶に散ったモクレンの幹と枝と花びらを早朝の公園で見た時に、私の臉に繁栄と破壊そして廃墟の光景が映し出されたのです。
- 一夜にして生から死へそして来たるべき再生。そこには日本人が桜に仮託する無常感などありません。白い花弁のカーペットは翌朝には茶色に変色しそのまま土に同化していきました。廃墟から再生が始まると安易に言葉にするには、世界は今あまりにも多くの破壊を突きつけられています。私たちは丸裸となった木蓮の木に再生を祈るほかに術はないのでしょうか。

木 金 土 日

4・5月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			21 映画会 お休み	22	23	24
25	26 読書会 13時半	27	28 映画会 お休み	29	30	5月1日 写経会 13時半
2	3	4	5 映画会 お休み	6	7	8
9	10 読書会 13時半	11	12 映画会 お休み	13	14	15
16	17	18	19 映画会 13時半	20	21	22
23	24 読書会 14時	25	26 映画会 13時半	27	28	29

読書会
4月26日(火)
5月10日24日(火)
13時半
5月から法華経2回目の読書会を行います。テキストはご用意いたします。

写経会
5月1日(日)
13時半

4月21・28日(木)
5月5日12日
映画会
お休みします

私の狂言綺語は一行目を書き始めることができたなら、後はあまり思い悩むことなく書き進むことができます。日常の出来事の点描から始まり、その関わりの中に自身の信行の道を見出しながら、その道が確かにお釈迦様の教えであることを確認する行為が、私が狂言綺語を書くということです。信行を続けていればそれがそのまま自然と文字になってくれます。ところがこの所、最初の一行をなかなか書き出すことができません。その果てに、今回は冒頭の言い訳がましい言葉から始めるほかなくなったという次第です。理由は明白です。ありのままに観てありのままに行うことが私の信行の日々なのに、ありのままを受け入れ難い現実が2ヶ月ほど前からいつ終るとも知れず私たちの前に突きつけられ続けているからです。少々回りくどくなりました。つまり破壊と暴力の前では宗教、特に私が信を置くお釈迦様の教えは無力なのではないかとの思いが錯綜しているからです。今ある戦争について、人は銘々の立場で価値判断を加えています。私たちが何かを判断するときには、その現象を「暴力」と「平和」や「破壊」と「創造」などの対立項として分別し、それを「善悪」の道徳や「損得」の経済視点など各々が価値基準を定め合理的に判断するというやり方が私たちの慣れ親しんだ世界の見方です。現在は政治、経済、人道などの立場からこの戦争について価値判断がされています。そこに安全保障、歴史観、地政学、民族の記憶、権力構造などのファクターが持ち込まれ、戦争反対、反対しない（賛成）、沈黙（消極的賛成）する、の3つの世界に分裂した現状があります。価値基準が唯一無二の絶対的真理であれば、起こっている事実の判断は同一でなければなりません。一つしかない現実を唯一の価値基準で合理的に判断したら結論は一つしかないことは自明の理です。世界の多くの人々が殺戮や侵略は絶対悪であると考えれば戦争は起りようがないはずですが、現実はその反対です。今の私たちは、一向に止まない殺戮とそれを支持する人や国が未だに多数存在するという現実、「戦争＝悪」という価値観が揺らぎ始め迷いと不安に駆られているのです。不安定な価値観の上で不安の日々を生活しているのです。そこで私たちはその原因を探し出し、何とかその不安を和らげようとしています。例えば「彼らを戦争まで追い込んだ西側に原因がある」「経済的な利害関係を無視はできない」「権力者が悪いのであって国民はかわいそう」「喧嘩両成敗、どっちもどっち」など、原因探しもこうなると収拾がつかえません。出口が見つからないならば「戦争＝悪」の出発点に戻る必要があります。

仏教の世界観は一如や、空という言葉で表されています。諸行無常であるということです。絶対や実在、価値などという認識は存在しえないという立場です。つまり「分別」と「価値」では世界認識はできないのです。以前の狂言綺語で書いたことの繰り返しになりますが「価値」という幻想のもとに世界を「分別」し二項対立を措定することは新たな「価値感」に基づく分別と対立関係を生み出す原因にしか成り得ません。「無分別」と「無価値」で世界を観ることがお釈迦様の言われるありのままの世界認識です。縁起の法則に従えば、今ここにある現象も諸行無常で実体はありません。人間も自然も戦争も死も平和も生もありのまま（無分別）の存在です。そこには善も悪も正義も不正もありません（無価値）。常無きものに価値を与えてもその瞬間に価値は無価値になるのです。このような世界認識の中にある私は「戦争＝悪」から始めることはできないのです。

仏教は「諦めの宗教」です。「諦める」はありのままに観ることです。この世界観（信）のままに生きる（行う）ことが安らぎの処への道を歩み続けることなのです。私が仏教を信じ続ける動機（願）です。この歩みは「諦める」ことから始まります。「諦める」はものごとをつまびらかにすることです。そこで宇宙の実相（真如）が明らかになります。あとはそこに向かって教えのままに歩むことができるのです。もしありのままでない所へ進もうとしていたならばその道を断念することができます。これも「諦める」です。一方、真如を明らかにしないままに断念することは「あきらめる」です。これは世界を自我（煩惱）で認識した結果です。後には後悔や恨みや愚痴が残ります。諦めないままに断念をしたからです。私たちはどんな困難があろうとも、今ここにある戦争を諦める必要があります。戦争というものにまつわる忌避感や闘争本能、人間の記憶の中に刻み込まれた殺戮と死への恐怖と悲哀と生存欲などが複雑に絡み合い、私は今ある戦争を諦めることがまだ出来ません。ただ「戦争＝悪」の価値では何も諦めることが出来ないことを、現実はありのままに示しています。

今、仏教は「諦める」ことが「あきらめる（断念）」に容易に転換しうる危機に瀕しています。今ある戦争をどのように諦めればよいのか、未だ私には分かりません。分からないと認識することが諦めたことなのか、それとも考えることをあきらめる（断念）ことが諦めることなのか、太平洋戦争中の仏教者はどのように日本の侵略を諦めたのか知りたいところです。戦争に積極的に賛意を表した仏教者の話はよく聞きますが、反対を貫いた人の話はほとんど聴くことができません。戦争の前に仏教は無力なのです。そう諦めればまだしも、仏教は何か役に立つことがあるはずだと勘違いをし諦めを放棄した人達が戦争協力をしたのではないのでしょうか。戦争は力と力のぶつかり合いです。その力は軍事力、経済力、政治力、情報力、意志力などのパワーの総合体です。それらの力の前に一仏教者である私はどれ一つも持ち合わせない全き無力です。宗教者には呪術力がありそれが有力な武器と信じられた時代はかつてのこと、現代ではその様なことを信じている人は誰もいません。私は戦争を前にして「仏教は無力である」と諦めるしかないのです。私が有力であれば「戦争＝悪」を標榜しその価値の中に安住することは可能です。しかし私は無力です。無力で無価値で無分別から

琉游舎：戸井 出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848 08033508152
各々が「私は無力である」と諦めることができれば「戦争という言葉はなく
矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850
なるはずだ」と信じ、祈ることが今の私のありのままの無力です。
メール：toi10lizuru@outlook.jp